

精神科看護実習の指導方法についての一考察 ——アンケート調査の結果から——

引野 裕子 矢倉 紀子

Hiroko HIKINO and Noriko YAKURA

A study of the guidance of the student nurse training in the psychopathic ward through the analyses of the questionnaires

精神科看護実習においては、学生は他科での実習とは異なり、患者は自分達とは別の世界に住む人達で、こういった人達を相手にしなければならないという恐怖感にとらわれることが多いと思われる。

上記実習の目標は患者と接することにより、講義のみでは決して得られない体験学習を通して、学生が患者の精神的苦悩に共感し、患者を価値ある人間として認識することにある。しかし、限られた短期間の実習では患者の心的体験に触れ、それに共感するまでに達することは到底困難であり、かえって患者の異常性のみ強調され、学生自身に誤った固定観念を植えつける結果ともなりかねない。

今回、私共は短期間に効果的な実習成果をあげるための指導法を求めるために、実習前および実習後の2回、学生に対して精神科看護に関するアンケート調査を実施し、学生の精神科患者に対する認識度について調査した。さらにこの調査をもとに、精神科看護実習のあり方についても検討したので報告する。

調査方法

調査対象は鳥取大学医療技術短期大学部看護学科3年生、77名(昭和55年度入学)である。調査方法は精神科看護の実習前に図1、実習後に図2に示すアンケートを配布し、回答を求め、集計した。アンケートは無記名で記入させた。調査集計率は実習前が77名中75名、97.4%、実習後は77名中69名、89.6%であった。

看護学科

精神科実習指導の参考にしたいと思しますので、下記のアンケートに御協力下さい。

1. 今までに精神障害者と接したことがありますか。
(国立療養所鳥取病院の見学以外で)
ある
ない
2. 精神障害者に対して、あなたはどのようなイメージをもっていますか。
3. 精神病院(精神科)に対して、どんなイメージをもっていますか。下記の項目で該当するものに○印をしてください(1人3つ以内選択のこと)
鉄格子 鍵 暗い 不自由 つめたい
さわがしい 縁どおい 静か きたない
明るい 自由 わからない 解放 身近か
きれい あたたかい その他()
4. 精神科実習にあたり何か心配なことがありますか。
ある
ない
あると答えた人はどんなことですか。

図1. 精神科看護実習前に学生に配布したアンケート

精神科看護実習の内容

1. 実習場所：鳥取大学医学部付属病院精神神経科，開放病棟（43床）。
2. 実習期間：精神科外来見学を含め2週間。
3. 実習方法：学生5～6人を1グループとし，学生1人に患者1人を受持たせた。
なお，当該週の2日間は学内学習にあて，グループによるテーマ別の共同学習やプロセスレコードの分析

今後の精神科実習指導の参考にしたいと思っておりますので，下記のアンケートに御協力下さい。

1. 実習で一番戸惑ったことは何でしたか。
(具体的に)
2. 受持患者とのかかわりの中で困ったことは何ですか。
3. 実習によって精神病に対する認識がかわりましたか。
かわらない
かわった
かわった人はどのようにかわったか
4. 精神病院（精神科）に対して，どんなイメージを持っていますか。下記の項目で該当するものに○印してください（1人3つ以内選択のこと）。
鉄格子 鍵 暗い 不自由 つめたい
さわがしい 縁どおい 静か きたない
明るい 自由 わからない 解放 身近か
きれい あたたかい その他（ ）
5. 受持患者に対して，あなたはどのような感情を持ちましたか。
6. 精神科看護に興味をもてましたか。
はい
いいえ
どちらともいえない
7. 将来，精神科看護婦になってもいいと思いませんか。
非常になりたいと思った
自分からはすすんでしたいとは思わない
全くやりたくない

図 2. 精神科看護実習後に学生に配布したアンケート

を行わせた。さらに文献学習として，精神を病む人による手記的なものと，精神科看護専門書最低1冊づつを読ませ文献カードの作成を義務づけた。

4. 実習指導者：病棟婦長，臨床指導係の他，精神科スタッフの協力を得て，短大教官1名が交代で病棟に出向き，直接指導にあたった。

5. 受持患者の疾病状況：表1に示す通りで，精神分裂病患者32名，初老期・老年期精神障害患者13名などが主なものである。

調査結果

A. 実習前アンケート調査結果

1. 精神障害者に対する接触の有無：本報告とは別途に企画した学生の施設見学を除いて，今まで精神障害者と接したことの有無についての回答をまとめると，接触したことがあると答えた者と，ないと答えた

表1 精神科看護実習における受持患者の疾病状況

病名	人数
精神分裂病	32
初老期，老年期精神障害	13
器質性精神病	10
そううつ病	6
非定型精神病	6
心因反応	4
中毒性精神病，薬物依存	3
その他	3

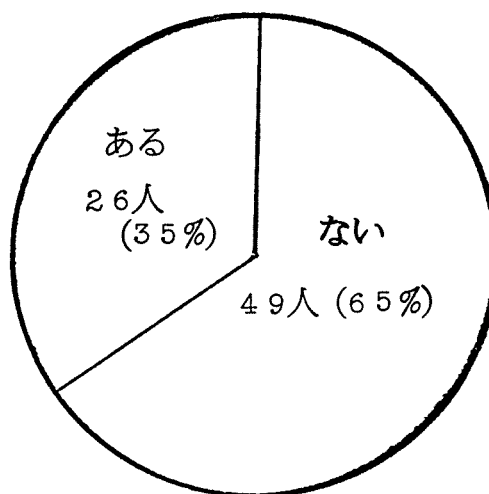


図 3. 精神科看護実習前のアンケート調査回答——精神障害者に接したことがあるか——

者は図3に示すように、あるとした者26名、ないとした者49名で、ほぼ1:2の比率となった。

2. 精神病患者に対するイメージ:表2に示すように、精神病患者そのものを受け入れようとする否定的回答をした者63名、精神病患者を受け入れようとする肯定的な回答を示した者5名、その他は17名となった。否定的回答の中では、こわいとする者が26名で最も多かった。肯定的回答は数が少ないため、特徴的な事項は見出されなかった。その他の回答では、かわいそうとする者が約半数の9名見出された。したがって、総体的にみると精神病患者に対して実習前の学生は否定的イメージをもっている者が多いという結果を得た。

3. 精神病院に対するイメージ:表3に示すように、重複回答になっている。否定的イメージを示す者は184名と圧倒的に多く、肯定的なもの19名、その他10名となっていた。否定的なものとして、鉄格子をあ

げた者46名、暗いと答えた者44名、鍵を示した者42名と、全体的に牢を連想させるような暗いイメージをあげた者が目立った。

4. 実習上の心配ごと:精神科看護実習にあたり、心配ごとの有無についての調査では、41名があると答えた。その内訳は、表4に示すように、どのように患

表3 精神科看護実習前のアンケート調査回答
——精神病院に対するイメージ——

n = 213*	
肯定的イメージ	19
静か	10
開放	4
明るい	2
自由	1
きれい	1
あたたかい	1
否定的イメージ	184
鉄格子	46
暗い	44
鍵	42
さわがしい	13
不自由な	10
冷たい	10
縁がない	9
きたない	8
恐ろしい	2
その他	10

* 学生1人3項目以内選択法による

表2 精神科看護実習前のアンケート調査回答
——精神障害者に対するイメージ——

n = 85	
肯定的なイメージ	5
より人間らしい人間	1
素直な心を持っている	1
自由な心を持っている	1
純粋な心を持っている	1
私達と無関係ではない人	1
否定的なイメージ	63
こわい人	26
話の通じない人	5
別の世界にいる人	5
いつ何をするかわからない人	4
何を考えているかわからない人	4
暗い感じ	3
異様で気持ちが悪い	3
変人	3
その他	10
その他	17
かわいそうな人	9
家族が大変	1
社会の人に理解されていない	1
薬清けの人間	1
わからない	5

表4 精神科看護実習前アンケート調査回答
——どんな心配があるか——

n = 41	
どのように接してよいかわからない	23
自分の言動が患者に悪い影響を与えるのでは	4
コミュニケーションがうまくとれるか	4
何をすれば患者にとってよいかかわらない	4
自分が精神病になりそうでこわい	2
心から理解してあげられるか不安	2
その他	2

者に接してよいのかわからないと答えた者が23名で最も多く、その他は自分の言動が患者に悪影響を与えるのではないかなど、接し方やコミュニケーションの方法についての不安をあげている者がみられた。これは患者への恐れのための不安というよりも、看護者として、患者への援助方法について知らないことによる不安が中心となっていると考えられた。

B. 実習後アンケート調査結果

1. 実習で一番戸惑ったこと：患者とのコミュニケーションの方法や接し方に戸惑いを感じたとした者が24名あり、最も多かった。また幻覚や妄想などを患者から訴えられて戸惑った者や、看護援助を拒否され、その対応法がわからず戸惑った者などが目立った。その他学生自身の問題、例えば患者への具体的な処置がないことに対し、他人から自分が怠けているように思われはしないかと気がひける、病棟の雰囲気になじめない、レクリエーション療法の際、学生のとるべき役割がわからず戸惑った、などの意見も見出された(表5)。

2. 受持患者との関わりで困ったこと：表6に示すように、受持患者とのコミュニケーションがうまくとれなかった、信頼関係がもてなかった、患者との距離のとり方がわからなかった、など患者への接し方についての不安を述べた者を総計すると20名となり、最も多かった。つまり、受持患者の病的言動に対しての自分達の対応の仕方の困難性を多くの学生があげているといえる。これは実習全体を通して戸惑ったこととい

表5 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——実習で一番戸惑ったこと——

n = 69	
患者とのコミュニケーション, 接し方	24
妄想, 幻覚を訴えられたとき	8
看護行為を拒否されたとき	7
訴えを信じてよいかどうかわからない	5
反応がないとき	4
その他の異常言動	6
処置がなく, 怠けているようで気がひける	2
病棟の雰囲気になじめない	1
レクリエーションのとき, 学生の役割に戸惑った	1
その他	11

う前問の場合と同じ傾向にあった。

3. 実習前後の精神病に対する認識の変化の有無：学生69名中、63名、84%が実習後に精神病に対する認識が実習前と変わったと答えた(図4)。認識が変わったと答えた者に対してどのように変わったかという内容に関する問については、表7に示すように、63名全員が精神病患者に対するイメージが肯定的に変わったと回答した。

4. 精神病院に対するイメージ：表8に示すように、重複回答になっているが、鉄格子, 暗い, 鍵などの暗い否定的なものをあげた者48名に対し、開放的、

表6 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——受持患者とのかかわりで困ったこと——
n = 69

コミュニケーションがうまくとれなかった	14
反応がないこと	6
援助の程度がわからない	5
方言等で患者のことが理解できない	4
信頼関係がもてなかった	3
距離のとり方がわからなかった	3
一方的な言動に困った	2
話が續かない	2
妄想の訴えに答えようがなかった	1
無し	6
その他	5
無回答	18

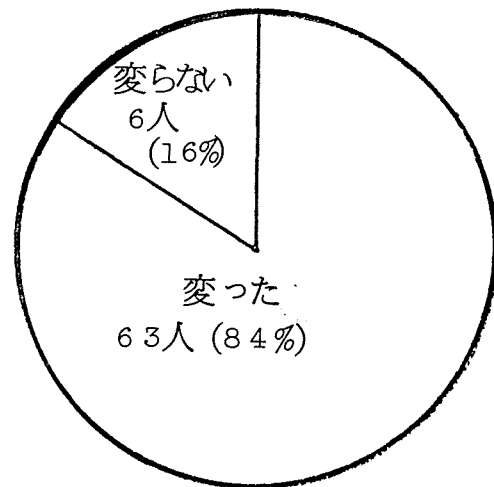


図4. 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——精神病に対する実習前後の認識変化——

表7 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——実習後、精神病に対する認識が
実習前とどのように変わったか——

n = 63	
思っていたより明るい	12
怖さがなくなった	11
普通の人と変らない	8
理解しあえる人間である	8
精神病=痴呆ではないことがわかった	6
変わった人、あばれる人ばかりではない	4
理解的態度を示さねばならない	4
根気よく見守らねばならない	4
信頼関係をつくることにより、心のふれあ いができる	3
薬物療法の効果が大きい	3

表8 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——精神病院に対するイメージ——

n = 161*	
肯定的イメージ	98
明るい	25
開放	21
自由	17
あたたかい	10
身近か	9
静か	6
きれい	5
否定的イメージ	48
さわがしい	13
鍵	10
不自由	9
鉄格子	4
暗い	4
きたない	4
冷たい	2
恐ろしい	2
わからない	8
その他	12

* 学生1人3項目以内選択法による

明るい、身近かに感じられるなどの肯定的イメージをもったとする者98名が認められた。この結果を表3における実習前でのイメージ内容と比較すると、学生は明らかに肯定的イメージの方向に変化していることが認められた。

5. 受持患者に対する感情：肯定的感情をもつ者53名、80%であった(表9)。表2にみられたような実習前における精神障害者に対する否定的イメージは、実習後では受持患者を通して明らかに肯定的に変化していることを示していた。

他方、6名と少数ではあるが、否定的感情を実習終了後においても、なお持っている学生が存在した。これらは患者との接触から生ずる妄想と現実との感覚上のずれや、正常と異常の区別が出来なくなるような感応現象と考えられた。この他、困惑したままで実習を終了したための精神的な苛立ちや、患者を自分勝手に表現する学生も見出された。

6. 精神科看護への興味の有無について：図5に示すように、実習後精神科看護に興味をもてたと回答した者は54名、78%であった。これは表3および表4で述べたような実習前の精神科看護に対する不安状態か

表9 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——受持患者に対する感情——

n = 69	
肯定的感情	53
かわいそう、同情、気の毒	14
早く治って欲しい	7
普通の人と変らない	7
苦しみを軽くしてあげたい	6
かわいい、妹のような	4
やさしい人、純粋な人	4
通じあえるようになってうれしい	3
その他	3
否定的感情	6
はがゆい、イライラする	2
理解できない	1
受け入れ切れない	1
強さがない	1
自分勝手	1
わからない	3
その他	7

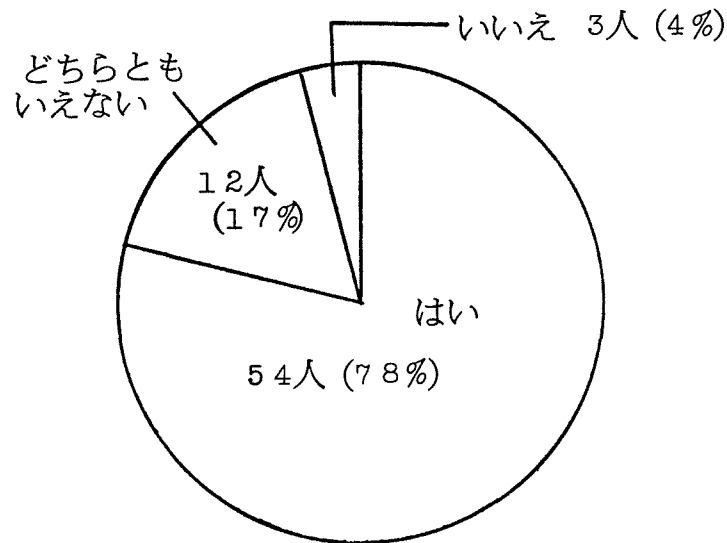


図 5. 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——精神科看護に興味をもてたか——

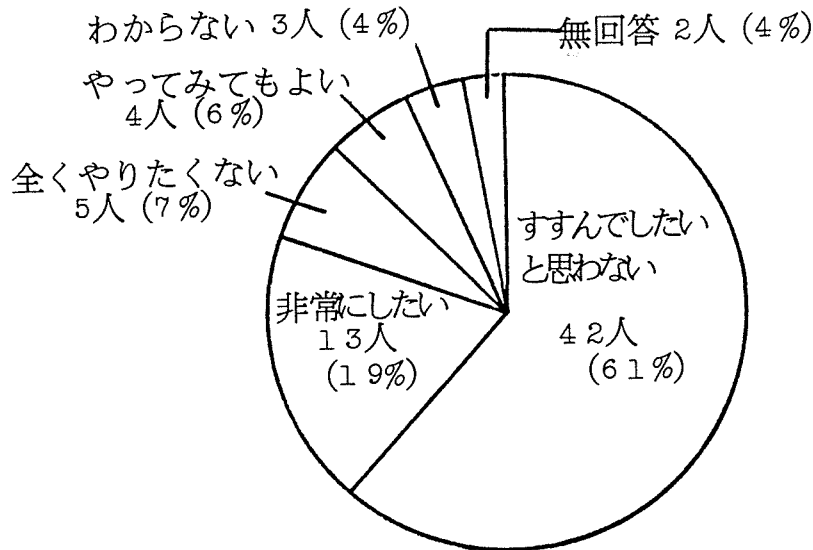


図 6. 精神科看護実習後のアンケート調査回答
——将来、精神科看護婦になってもいいと思うか——

らは明らかに改善された状態となっていた。

7. 精神科看護婦への志向の有無について：図6に示すように、自分の意志から積極的に精神科看護婦の途を選択したいと思わないとする者42名、61%、全くやりたくないとする者5名、7%、熱望する者13名、19%、やってみてもよい可能性を示す者4名、6%であった。したがって、総体的には希望しない者が多いという結果を得た。

考 察

精神科看護は、患者に人間としての基本的価値を認めることから始まるといわれており、遠藤¹⁾は精神科での看護実習のあり方について、異常な人間への働きかけや接し方の技法を学ぶことのみではないと述べているが、正に当を得た発言といえよう。一般に精神病の経過は長く、疾患に特有の症状が形成されるまでには長期を要し、短期間の実習で学生にこれを完全に学

ばせることは到底不可能である。かえって、短期間であるがために、患者の異常性のみが目立ち、患者の苦悩を理解させようとする教官側の本来の目的からはずれてしまう危惧が多分にあるように思われる。

そこで、できる限り患者への理解を深めさせることを目標として、効果的な指導方法に組み入れるための基本的事項について、実習前後の学生の精神科看護に関する認識度を比較検討してみた。

1. 精神科患者に対する実習前学生の考え方

対象学生は、精神衛生と精神科疾患看護学を学び、かつ精神病院の施設見学をしているため、ある程度精神病院についての知識をもっているが、精神科病棟での実習経験はまったくない状態であった。実習前学生のアンケート調査の回答結果からは、精神病そのものを受け入れようとしない否定的な考え方を示した者が多かったが、その内容は患者との接触技術に対する不安が多かった。つまり、精神科看護実習経験はないが、精神科看護に取り組む姿勢は一応でき上がっていると解釈された。また、精神病院に対する学生のイメージとしては、鉄格子、暗い、鍵というような牢を連想させる暗いものであった。これらは島谷ら²⁾の報告にあるように、精神科での看護実習未経験学生は、一般社会人のみ精神科患者像と大差なく、実態の分からない対象に対する不安を意味するものと解された。

2. 精神科患者に対する実習後学生の考え方

精神科看護実習前に示した精神病患者や精神病院に対する学生のイメージは、実習終了後に大きく変化し、否定的イメージから肯定的イメージへと転換していた。学生が1人の受持患者の看護を通して精神科全般を理解させることを私共は期待しているが、中村³⁾の報告のように、患者を個人として尊重することが、患者理解に役立つことを確認した。しかし患者を通しての精神科全般に対する理解を肯定的に変えさせたのは、野田⁴⁾の指摘するように、学生を開放病棟で実習させたことが、実習後のイメージ変化に大きく関与していることも考えられた。

この実習形態において、指導上私共が困惑したことは、学生と患者のコミュニケーションのあり方や学生が患者への接し方についてであった。学生の能力でどの程度患者の心的体験を理解できるか甚だ疑問の多いところであったが、Travelbee⁵⁾の、共感への努力がその体験を知る重要なプロセスであるという指摘に従って、敢えて患者に対する共感への努力を学生に行わせた。この結果、学生は表面的な患者との接触技術ば

かりでなく、個別患者の示す複雑な精神的体験に接触しようとする態度が観察された。

このような実習体験を通して、受持患者に対する学生の考え方も実習後では大きく変わり、かわいそうという表現に代表されるような患者への同情の気持が強く表われるようになった。これらは精神科患者への認識の度合いとしては、田実⁶⁾の指摘のように極めて初歩的なものではあるが、精神科看護の基本的な患者理解の始まりと解された。

3. 効果的な精神科看護実習方法について

精神科看護実習における基本は、学生を患者に接触させるとことにあると思われる。このことは、一般病棟で働く看護婦でも精神科病棟での臨床経験を踏まない限り、患者への心の援助や共感というような心情が現われ難いという野田⁷⁾の指摘にもある通りである。

したがって、今後の精神科看護実習を効果的にするための具体的な方法としては、つぎのような点があげられる。1)患者の示す病的言動に対して学生が戸惑いをみせている場合には、教官側からタイムリーに適切な助言を与える。2)患者理解の効果をあげるために、プロセスレコードを作成させ、その都度教官が、点検して助言を与える。これらの実施により、中村⁸⁾、神郡⁹⁾の報告と同様良好な結果が得られた。3)実習中にカンファレンスをもうけ、学生同志の体験結果を発表させることにより、学生間での患者理解の度合いを比較させ、これを深めさせる。以上のことを精神科看護実習の指導の要点として取り上げたい。

要 約

精神科看護実習を短期間に効果的に行わせるための検討資料とするため、実習前、実習後に学生の意識調査を試みた。

1. 実習前の学生は、一般に精神科患者、ならびに看護に対し、恐怖感に関連するような否定的反応のあることが見出された。

2. 否定的反応の内容としては、患者が恐ろしい、病棟が周囲から隔離されて暗いなどという既成観念があることがわかった。

3. 実習後の学生は、実習前に示した否定的反応が大部分消失し、肯定的反応をもつように変化した。

4. 実習指導上の要点は、第1に患者への恐怖感を学生に抱かせないよう十分実習前指導を行うこと、第2にまず学生を患者に接触させ、生じた問題点につき

適時指導すること、第3に学生同志の体験結果を発表、検討させることにより、学生間での患者理解を深めさせることである。

文 献

- 1) 遠藤恵美子, 看護教育, **20**, 155-162, 1979.
- 2) 島谷秀人, 阿部尚子, 牧 なつ, 大西美津恵, 山川良一, 宮本 進, 杉原 功, 沢田みねよ, 渡辺ひで子, 多々良そよ子, 白柳マツエ, 日本精神科看護学会看護研究, **21**, 129-142, 1978.
- 3) 中村令江, 看護教育, **14**, 792-797, 1973.
- 4) 野田正彰, 看護教育, **19**, 559-569, 1978.
- 5) J. Travelbee, 長谷川 浩・藤枝知子訳: 共感の位相, 人間対人間の看護, pp. 200-201, 医学書院, 1980.
- 6) 田実光子, 日本精神科看護学会看護研究, **20**, 15, 1977.
- 7) 野田正彰, 看護教育, **19**, 567, 1978.
- 8) 中村令江, 看護教育, **14**, 792-797, 1973.
- 9) 神郡 博: 患者=看護者関係とプロセスレコード, 精神科臨床指導の実際, pp. 21-37, pp. 131-132, 看護の科学社, 1978.

SUMMARY

Student's awareness on the patient and the nursing care were investigated to be effectively trained in the psychopathic ward within a short term. These investigations were done through the questionnaires before and after the nursing training on the ward.

Prior to the above training, students were afraid to contact personally with the patients. However, they took a sympathetic view to the patients after that.

The nursing training in the psychopathic ward was the most important to bring student into contact with the patient and to take away student's fear to the patient.

(受付 1983.12.26)